

## 第二十八回 津久井城

みませとうげ  
～三増峠の戦い～

津久井城は、現在ダムにより津久井湖となっている相模川上流沿いにある山城です。ここは、この城自体というよりも、日本史上最大級の山岳戦と言われる三増峠の戦いに登場する城ということで、その名を知られています。今回は、武田信玄が北条氏康の息子らの軍勢を鎧袖一触にしたという三増峠の戦いについてご紹介します。

### 甲相駿三国同盟の破綻

甲相駿三国同盟とは、甲斐の武田晴信（信玄）、相模の北条氏康、駿河の今川義元の間で結ばれた同盟で、それぞれの娘を互いの嫡子に嫁がせる形で成立していました。これにより、互いに有力な敵に背後を脅かされることがなくなり、武田信玄は北の信濃攻略へ、北条氏康は東の関東攻略へ、今川義元は西の三河・尾張攻略へとそれぞれ注力することができるようになっていました。ところが、今川義元が桶狭間で織田信長に討たれてしまい、覇気に欠ける氏真が跡を継ぎます。他方、武田信玄は信濃攻略戦をひととおり収束させ、上杉謙信との消耗戦から方針転換を図りたい情勢となってきました。さらに、武田信玄の嫡男、義信が謀反のかどで幽閉され、切腹するという事態となり、その妻が今川家に帰されるなど、武田家と今川家との関係が悪化していきます。このようにして同盟は崩壊へ向かい、ついに武田信玄が駿河へ侵攻します。信玄は北条氏康に対して今川領の分割を持ちかけますが、初代北条早雲が今川家の協力のおかげで戦国大名になったという経緯もあり、北条氏康は娘婿の今川氏真を救援すべく駿河に派兵。これにより武田、北条の間も手切れとなり、ついに三国同盟は完全に崩壊したのです。ちなみにこの頃、今川家が北条家と謀って海のない武田領への塩の交易ルートを封鎖し、武田と敵対する上杉謙信にも共謀を持ちかけたところ、謙信は敵を恐れる卑怯の振る舞いであるとしてこれを受け入れなかったため、上杉領からは武田領へ塩が届いたという話があり、「敵に塩を送る」の故事として知られています。

### 武田信玄の関東乱入

ここで武田信玄は思い切った手に出ます。駿河へ多くの援軍を送り込んで手薄な北条領へ、2万の大軍を率いて北の碓氷峠から乱入したのです。武田勢は二手に分かれて各地の支城を攻撃するとともに方々の民家で略奪を繰り返しながら、小田原城へ押し寄せました。その間、いずれの城も軍勢を欠き、ほとんど反撃できなかったようです。しかし小田原城は広大な総構えを有する天下の堅城。以前に上杉謙信が率いる大軍を退散させた時と同様、周囲の軍勢と農民・町民まで全て城内に入れて籠城策を採りました。果たして略奪する物も無い武田勢は、付近の民家を数カ所焼き払っただけで、わずか3日にして早々に退却して行ったのでした（第9回「小田原城」参照。）。

### 三増峠の戦い

そして、三増峠の戦いへと続くのですが、ここでは最も劇的に書かれている甲陽軍鑑のストーリーに沿った形で紹介してみよう。

小田原から退いた武田勢は鎌倉へ向かうと見せかけながら、一転して相模川沿いを北上。三増峠を通過して津久井から甲斐へ退却しようとした。この動きを察知した北条氏照（氏康三男：滝山城主）、氏邦（氏康四男：鉢形城主）らをはじめとする関東各地の北条勢は三増峠に布陣して武田勢を迎え撃とうとします。そこに地黄八幡の異名をとる北条綱成らも駆けつけ、1万を超える軍勢を揃えた北条勢は、小田原城から追撃に出た北条氏康・氏政の本隊1万余との挟撃を企図しつつ、武田勢を待ち受けました。

一方、前方の北条勢に気付いた武田信玄は、即座に戦闘を決意。軍勢を三手に分けます。まず小幡重貞らの一手を先行させて津久井城を牽制させました。津久井城は三増峠を越えた先にあり、この城からの援軍を防ぐ必要があるというだけでなく、退路を確保するという意味もあったで



武田勢の進軍ルート

しょう。この牽制軍はしっかりと役目を果たし、津久井勢は三増峠での戦闘に加わることはありませんでした。次に、山県昌景らの一手には並行する志田峠を越えさせ、残った手勢は工藤昌豊（内藤昌豊）に率いさせた足の遅い小荷駄隊を先頭に、馬場信房、浅利信種、武田勝頼らの部隊と信玄の旗本部隊に戦闘態勢を固めて進軍させました。

そして、ついに戦端が開かれます。荷を捨てて混乱する武田勢の様子を高台から見てとった北条勢が小田原からの後続を待つことなく攻撃を仕掛けたのでした。武田勢を一兵も帰すまいと勇み立つ北条勢の勢いはすさまじく、武田方の小荷駄隊は相当な被害を受け、浅利信種が北条綱成隊の鉄砲に当たって討ち死にするなど、戦闘は北条有利のうちに進みます。しかし、ここで志田峠へ向かったかと思えた山県昌景らの一手が北条勢の横腹から猛然と襲いかかりました。赤備えで知られる精強部隊に不意を突かれた北条勢は一気に崩れ立ちます。もともと山岳戦となれば、山国甲斐の武田兵の方が関東平野の北条兵よりも巧みであり、北条勢は3千を超える戦死者を出して敗走したと伝わります。こうして行く手を阻む大軍を打ち破った武田信玄は、勝ち戦に浮かれることなく速やかに峠を越えて去り、あと10km程に迫っていた小田原城からの追撃軍は虚しく帰還するしかありませんでした。

甲陽軍鑑の記述は信用できない点が多いと言われますので、本当にこのような作戦が見事にはまったのかどうかは分かりません。例えば、北条側の視点から書かれた北条五代実記では、追撃を受けた武田勢が三増峠に陣地を構築して待ち構えていたところへ北条勢の先陣がはやっ

て後続を待たずに攻めかかったため、武田勢を取り逃がしたばかりか味方にも多数の死傷者をだしてしまったと記されています。とはいえ、三増峠付近において大規模な山岳戦が行われ、武田信玄が北条勢に大損害を与えて敗走させたことは確かだと考えられます。

さて、三増峠においては勝利を得た武田信玄ですが、結局、大軍を催して北条領深く攻め込みながら、小田原城の堅城ぶりに手も足も出せずに退却したことになります。しかしながら、後の歴史家による考察では、武田信玄としては、駿河方面での膠着状態を打破すべく、北条領に直接的脅威を与えることが目的だったのであり、堅城で知られる小田原城を落とす気など無かったのではないかとされています。そういう意味では、本来の戦略目的は十分に果たされたものと考えられ、実際、この後、武田と北条は和議を結び、武田信玄は駿河を手に入れて三河の徳川領へ侵攻していくことになるのです。

## 現在の津久井城

三増峠の戦いが実際に行われた場所がどこであったのか、現在の東名厚木CCの一角が武田信玄が本陣を張った場所だという伝承もあるようですが、正確なところは分かっていないようです。

一方、津久井城跡は神奈川県立津久井湖城山公園として公園化されており、ハイキングコースを登れば、土塁の遺構に囲まれた本丸跡から眼下に津久井湖を見下ろせ、遠くは都心の方まで見晴らすことができます。そして、その反対側が三増峠及び志田峠の出口方向で、津久井城牽制部隊が布陣したと考えられる一帯が見渡せます。わずか3km程の山向こうで繰り広げられた総勢3～4万の山岳戦を、津久井衆はどのように見ていたのでしょうか。



武田の牽制部隊が布陣したと思われる方向